

憂楽帳



兵庫・尼崎の開業医、長尾和宏さん(62)は在宅医療のスペシャリストで、体験を多くの本にしている。10万部売れた著書などを原作にした高橋伴明監督(71)の新作映画「痛くない死に方」について聞くと、「難しい内容をしっかり描いてくれた」とうれしそうに答えてくれた。

長尾さんが訴えてきたのは自宅のみとる「穏やかな最期がある」ということ。脚本も手がけた高橋監督の狙いもそこだ。しかし、物語前半に出てくるのは自宅に戻った肺がんの末期患者が苦しんで亡くなる姿。担当の在宅医は患者の

体の痛み 心の痛み

娘からの相談を会わぬままに電話対応で済ませていた。みとった後に娘が言う。「在宅医療で平穏死なんてうそばかり」

娘のモデルは長尾さんの本を読んで自宅のみとりを選んだ女性。その切実な体験を基にまとめた著作が、映画の原作になった2本のうちの1つだ。長尾さんは「美談だけでは語れない。医療としてしっかりしなければ」と自戒する。

3年前、私は父を病院でみとった。求めたのは言葉を尽くす医師の姿勢だ。たとえその言葉が心に痛みをもたらしたとしても。【河出伸】